

世界の人びとのための JICA 基金活用事業 活動報告書

1. 業務の概要	
(1) 事業名	「少数民族女性と障がい女性を支える製品づくり」(通常枠)
(2) 実施団体名	特定非営利活動法人 Support for Woman's Happiness
(3) 実施期間	2022年2月25日 ~ 2023年2月24日
(4) 実施国	ラオス
(5) 活動地域	ラオス(ビエンチャン、ルアンナムター、ウドムサイ、ルアンパバーン)
(6) 活動概要	<p>①活動の背景:</p> <p>Support for Woman's Happiness は 2017 年に障がい当事者のオファーを受けてラオスで障がい作業所ソンパオをオープンした。ラオス全土から訓練を受けたい障がい当事者が集まり、2022 年には 50 名の所属となった。作業の柱は 2 つあり、1 つは日本企業からオーダーを受けて小さな工場として稼働していくこと。もう 1 つはクオリティの高いラオス土産を作れるように訓練し、将来的に障がい当事者だけで製品づくりから販売まで担当できるようになること。その両方で障がい当事者の生活を支えるため、障がいがあっても最低賃金をもらえるような作業所づくりを目指している。ブランド FranMuan を立ち上げ、最初に取り組んだレンテン族のシリーズは 2020 ソーシャルプロダクツ賞を受賞した。またラオスと御殿場の障がい作業所同士が連携して製品づくりを行う活動が認められ、2020 年のジャパン SDGS アワード外務大臣賞を受賞することができた。2021 年に農園を開所し働くことのできる障がい男性の雇用にも力を入れている。2020 年、2021 年度と世界の人びとのための JICA 基金活用事業に採択いただき、少数民族村と作業所での製品づくりを進めてきた。採択を受け、さらにものづくりを発展させることができ、刺繍のトートバッグ、くつ、刺繍入りの洋服などを製作指導することができた。それらの製品はラオス国内で構える作業所のショップや、日本国内のラオス展で展示することができた。新しい技術を得ることが障がい当事者の支えになり、コロナ禍の厳しい状況を乗り越える一助となった。また観光客が来ない民族村の女性たちにも大変喜ばれた。一方でラオスへの観光客の戻りはまだまだ先になると思われ、昨年度指導できなかった帽子やハイヒール、ワンピースなど海外にむけて輸出できるレベルの製品づくりと製品管理が急務となっている。</p> <p>②活動の目標:</p> <p>最終的に障がい作業所と民族村が自立してやりとりをし、製品を作りラオス国内で販売または輸出することで収益を得ることができるよう、ノウハウを 1 つずつ指導している。4 年間で作ることが出来る製品種類が増え、クオリティの向上と高級品の製作指導を行ってきたい。洋服に加えて帽子や靴などはラオスの生地の良い生かしたデザインが求められており、良い製品づくりを行い持続可能なスモールビジネスに発展できるよう指導していく。</p>

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

【実施内容①】

北部エリアの各民族村へ通い、パーツ作りの指導を実施。ラオスの少数民族の文化は多様で、この文化を活かしたものづくりを継続して行くためには定期的に村人と交流しながらアイデアを出し合うことが必要になる。村人からはこの生地には刺繍がしづらい、この草木は色が出づらい、時期によって染めることができないものもあるなど、担当者が村人から聞き取りを進め状況の把握を行った。昨年同様、コロナ禍の影響があり日本チームの渡航は1回のみにとどまったため、現地担当者（ラトサミー）に聞き取りと指導を依頼した。パーツ制作のスピードは農繁期を除けばおおそ予想通りに進めることができた。一方でコロナ禍における観光業の落ち込み、ものづくり産業の落ち込みから綿花を育てる農家が減っている。コロナ禍3年目に入り綿花栽培をやめた件数の影響が出始め、糸・布の不足が見られる。染色については今のところ原料減少の報告は受けていないが、今後の動向に注視したい。全体としてはオーダー→製作→完成後、障がい作業所に送付 という一連の流れが身に付いて円滑に進んでいる。今後も定期的に通うことで意思疎通を図っていききたい。

【実施内容②】

障がい作業所で靴づくりのステップアップ、雑貨への波及効果の確認。少数民族村で織り、刺繍したパーツを障がい作業所で靴・雑貨作りに活用した。靴に関しては事業を開始した当初は3名ほどの作業者しかいなかったが、より多くのメンバーに作業の機会が与えられるようになった。現在は10名が作業を理解し、うち5名の技術が特に向上している。

製作した靴の種類としては、前あきのサンダルだけでなく、夏用のヒール、トングサンダルも作るできるようになってきている。

シルクの織り生地を使ったハイヒールに関しては指導が進まなかったため、次期に持ち越して引き続き製作にチャレンジする。

靴の製作で使いきれなかった余り生地を活用して雑貨類の製作も進めることができた。

(2) 実施成果：

障がい作業所において靴作りは予想以上の成果が出ており、作業者のモチベーション維持にも繋がっている。ミシンの作業に比べて、作業に参加できるメンバーが多いこと、ラオスでの流通もある程度できていて効果が見えやすいことも要因としてあるように思える。

当初はさまざまな材料を購入して寄付することを予定していたが、靴の製作チームの意欲が高く、障がい作業所リーダーがエントリーしたコンテストでエンパワメント賞を得ることができ、3名のメンバーがタイに研修に行くことも出来た。

想定より進みが早く、材料を自力で調達できる目処が立ったため、予定していた物品支援の一部は行わないことにした。

今後も一定の資材の寄付は続けて行くが（特に靴底に使用するラバーなどが作業所にとっては高額であるため）、できるだけ早く自走させるためにも、少しずつ「支援」という形は少なくしていきたい。

これまで物作りで教えてきたデザインを活かして、自分たちでデザインを考えたり、手毬のパーツから着想を得てサンダルの飾りにつけたり、発想力の伸びを感じることができた。

またデザインが連動した雑貨類の製作にも着手し「シリーズ化していく」ヒントになった。シルクを使ったハイヒール作りは進んでいないため、これは次期の課題として取り組んでいく。

基礎的な作業が安定してきたため、次の目標を決めて製作ができるように流れをつくっていきたい。次の1年で支援がなくても自走でき、オーダーを受けて靴のプロジェクトが回って行くのが目標である。

民族村でのパーツ指導は作業所ほどのスピードではないものの、全体的に良い流れで進めることができた。コロナ禍で全体的に村へのオーダーが減っており、各村からオーダーの継続について感謝されることが多かった。

村によっては次のオーダーはいつか？という質問が出たり、この期間なら何個は製作できる、というすり合わせが入ったり積極的な動きがあった。

生活に直結しているということもあり、熱心に参加してもらえてありがたく、また今後の成長を感じることができた。

次年度は今期製作した靴、雑貨だけでなく他の製品への展開も検討していきたい。

障がい作業所においても民族村においても、自立・自走を目標として進めているが、それぞれの頑張りが結果につながった1年であった。

(3) 得られた教訓など：

ラオスは気候が暖かい国であるため、一般市民はハイヒールをはく機会が少ない。障がい作業所でもハイヒールよりサンダルのほうが身近に感じるのか、サンダルの製作が優先されている。一方でシルク生地をつかったハイヒールは高級店で取り扱ってもらえる可能性もあるため、文化やニーズの説明をもっと丁寧に行う必要がある。

綿花栽培の減少など、生活に直結する現場では「売れない」＝「作らない」になってしまう。物作りの現場では一度ストップしてしまうと取り返しがつかないケースもあるため、生活を守ること・文化を守ることが最優先に進めて行く必要がある。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針：

靴の制作についてはハイヒールなどの新しいデザイン、色展開などを指導していく。

また10月にはフランス パリでラオス展を開催するため、フランスデビュー作を製作する。2017年に障がい作業所をオープンしてから6年目に入り、基本的なものづくりの技術が定着してきたこと、コロナ禍においても作業所をクローズすることなく継続できたことは障がい当事者にとって大きな自信につながった。

リーダー教育・ものづくりの発想力向上に向けて日本での研修を導入したい。

毎年必ず3～5名がものづくりの現場・流通の現場を視察し勉強できるように形にしていければと考えている。海外での研修は大きな刺激になり、より自発的に「もっとこういうものを作りたい」「こんなブランドにしたい」という活動につながると想像できる。

いずれ我々のサポートがなくなっても、当事者だけで企画・デザイン・製作・流通まで対応でき、暮らしを支えていける基盤にしてほしいと願っている。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

こちらの想定よりも大きく成長していると感じた。2017年当時には想像できなかったが、作業所の建物を自分たちで持ちたい・何があっても集まれる場所、身を寄せられる場所を持ちたいといった希望が当事者から出ている。自立への大きな一歩であり、ラオスでは育ちにくいと言われている「自発性」や「積極性」が育っていることを嬉しく感じている。こういった動きがいずれ「どういう福祉を組み立てて行くか」につながって行くことと思う。

(2) 活動の写真



障がい作業所の様子



靴づくりのチームを引っ張るスッチャイ



新たなデザインも製作できるようになった



ラオスらしいデザインのサンダル



カラーバリエーションの展開



作ることができるようになった靴



2年半ぶりに訪問した障がい作業所の様子



レンテン族の村での作業

(3) JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

予定通りにはなかなか進まないものの、1つの事業に対して1年・2年・3年と計画を立てて進めて行くことで作業所の良い点、改善点に気づくことができた。さらに、日本側が想定している以上の成長や可能性を見ることができて、この機会に感謝したい。